

所 陵

ISSN-0913-1906

No. 41

関西大学博物館集報

平成12年9月30日発行

〔SENRYO・KANSAI UNIVERSITY MUSEUM REPORT〕



石槍 Spearhead Points

目次

鳥のように	2
隋の文帝陵と煬帝陵踏査記	4
こどものための博物館 百周年！	6
平戸の海外交渉史跡	8
銅鏡に見る神獣紋様・銘文の配置	10
硯・文房諸具との出会い	12
平成12年度博物館企画展及び博物館講座	13
三角縁神獣鏡の製作技法	14

関西大学博物館

〒564-8680 大阪府吹田市山手町3丁目3番35号

Tel 06-6368-1171 (直通) FAX 06-6388-9928

<http://www.kansai-u.ac.jp/Museum/museum.htm>

鳥のように

上 井 久 義

仁徳天皇は、その名をオオサザキという。その由来について「書紀」によると、武内宿禰の子供が生まれるとき、産屋にサザキが飛来したのでこのことを応神天皇に語った。すると天皇は同じ日に子供が誕生し、このときヅクが産屋にやってきたという。これは目出たいことであるからとして、互にその鳥の名を交換して子供の名前にしたという。血縁的に関係のない者が、互に相手方の子供の名付け親になり、成長する子供たちを相互に支援する慣行があるが、サザキとヅクの交換命名は、これが古代にまで遡及することを伝えている。

それにしても子供に鳥の名を付けることは特異な事柄のように思われる。しかし天若彦の葬送儀礼には、鳥たちが役割割り分担をしたと神話にあることから見て、これらは人たちがそれぞれの役に定められた鳥を演じている姿として受けとれる。伊勢神宮の式年遷宮の儀礼に、神官の一人が鶏を演じてカケーとないて時刻を知らせるのも同様である。上鴨神社の祭礼では、神官二人が鳥の仕草をまねて、両足をそろえたままでびょんぴょんと砂盛りの前に登場し、カアカアと鳴き声をあげる。これらのことは古墳にたてられた形象埴輪の鳥たちも、当時の生活環境として存在した鳥の姿を飾りとして立てたという意味だけではなくたことを示している。

古墳のことは墓と標記している。ただ天皇一族の墓は陵と記している。御陵はミササギと云うが、ミは美称であるから、陵そのものはササギである。しかもより古くはサザキと称した。これは仁徳天皇の名と同じである。このことは鳥としての大きなサザキという意味であると同時に、大きな御陵という意味をも示している。百舌古墳群にある巨大な前方後円墳は、オオサザキの名にふさわしい存在であったことになる。

古代東アジアの王たちのなかには、卵生まれの出自伝承を持つ者が多い。高句麗の好太王もその一人である。日本では、伊勢神宮の祭祀に

鳥子名舞が演じられるのもその流れをくむものである。祖神を祭る神殿の前で、数名の子供たちが輪になって廻り、一所にまとまってかがみこみ、次は一斉に開いてヒヨヒヨと云うのであるから、鳥の誕生を演じていることになる。

三重県磯部町坂崎の宇気比神社では、一月五日に当人による神事が営まれている。伝統的な式次第を間違いなく伝承するために、式次第を記した板が掲示される。(次頁下参照)

宇気比神社は東面し、社殿の前の境内に薙を敷き、一同が座につく。神殿から見て左側には一番座、右側に二番座がすわる。祭りの当番には二名が選ばれ、年長者が一番座、年少者が二番座を務める。各座とも上座から、旧当の年長者の父親、この人物に付添われた当人の娘、新当年長者の娘、当人の父親、以下は座の当番を務めた順に着座する。これと向い会った二番座も同様の順で着座する。この座には舌の形をした餅5枚を餅の帯で束ねたシタ餅と、モチ米を粉に砕いて酒でこねたシトギをシラ餅とよんで参加者に振舞われる。シトギを餅と称しているのは興味深い。

行事の中心は、当人4名による弓行事である。射手は杯に酒を注いでもらうと、その盆の上を時計方向に三回まわしてから飲みほす。この時に15才になった少年が、松の葉を束ねたものを持っていて、射手の目の横を強く押しつける。射手を鬼に見立ててその目を突くことを演じているようである。次いで当人は的に向かって矢を放つ。次は獅子頭を神前に飾る。次の「鳥ノ舞」は、15才の少年が鳥兜を被り、天狗の面を付け、シタ餅と土器をのせた膳を持ち、これに酒を注ぐと、当人4人が時計の方向に回り、少年の前にきた者がこの酒を飲む。無言のまま3回まわって終る。次の「コホリコソ」も同様で、中央には今年の当人が立つ。これを8人の座衆がシタ餅と土器をのせた膳をもってまわる。当人は自分の前にきた者の土器に酒を注ぐ。このとき一同は首に御幣をさげている。幣をつけた注連縄をまけば、そのものが神聖であるこ

とを示すように、このときの参加者は神聖な者であることを表わしている。体が見えないほどの御幣で覆われた人物が祭礼に加わり、これを「一ツ物」と称する例がある。坂崎の当人たちは一枚の幣を象徴的に下げているだけであるがその意味は「一ツ物」と変りはない。彼等が三回まわる間、「コウリコソヤ、コウリコソ、的をうった者は」と繰返し唱える。コウリとは、垢離のことで、「神事のために垢離をとって弓行事で的を射た者は誰でしょうか」とでも云った意味であろう。これは子供の遊びで中央に目隠しした鬼が、背後にいる人が誰であるかを云いあてるカゴメカゴメの遊びの姿に通うものがある。この遊び、原型は中央の人物に靈力を寄り付けるシャマニズムの作法だとされている。坂崎の神事では、これがまだ儀礼の世界に生きていて、これによって次年度の当人を神の意志によって差し定めていたのであろう。「鳥ノ舞」と合せて同じことが二度行われるのは、毎年当人が二名選定されてきたからであろう。かつては風流を思わせる振りが伴っていたのであろうが、現在では次期司祭者の選定をする役割りとして存在している。滋賀県野洲町の三上神社の芝原式で、鳥兜を被った者が鉦で次期当人を指し定めていることにも通じる姿である。そしてコウリコソは、伊勢神宮に伝承された鳥名子舞を、周辺地域で伝えてきた稀な例であろうと思われる。そして中央の鬼の役が、鳥兜の少年に置きかえられているのは、鳥役がこれを演じることが自然であるとする思想が流れていたからであろう。

奈良県下の弥生遺跡から、網目の衣服を着て両手をさしあげて立つ鳥を描いた土器が出土し



鷹の埴輪



三重県磯部町坂崎にある宇気比神社の祭礼

ている。その姿から、鳥そのものではなく、人が鳥を演じているように見える。人が鳥の姿になるのは、ヤマトタケルが鳥の姿で他界に飛びたつときか、祭祀の度ごとに祖神の姿となって司祭者がよみがえりを演ずるときであろう。そしてこれが古墳時代の大王の場合には、陵の字をあてたサザキがその舞台となったことであろうと考えられる。

本博物館には小型の鳥型の埴輪が展示されている。これも、とりまく自然環境にたまたま鳥がいたということではなく、その祭場で、儀礼の一端を演じる意味をになっていたものと考えられる。

旧正月五日神事式次第	着座	白餅ヲ引ク神酒ヲ出ス	次三献廻シテ御酒奉獻	次小飯ヲ取りの場ニ飾ル	次四献通シテ御飯ヲ飾ル	次のノ飯ヲ取ル	次五献目出シタ俣	古禱的二立ツ續キテ	新禱的二立	次のノ行事終リテ小飯ヲ	各席ニ返ス	次瓶子酒ヲ廻ス	次獅子ヲ神前ニ飾リ	新禱獅子ニ紙ヲ附ケ終リテ	再ビ宮入口ニ直ス	次鳥ノ舞	次コホリコソ（八人廻二回）	次サンヤサッサ	次注連アゲ	次塩搔キ 齋主鳥井内	下座ニ着ク齋主獅子ニ餅ヲ供	ヘテ拝ス後獅子ノ行事	次口初メ	獅子ノ行事終ル	退下

隋の文帝陵と煬帝陵踏査記

藤 善 眞 澄

中国皇帝陵の踏査記第二弾として、ここに対照的な父子の陵墓を紹介するのは、隋の文帝陵と煬帝陵である。

1995年8月、このたび大阪は北浜で開催された鳳翔法門寺文物を含む扶風地域の調査見学を実施した。法門寺は1990年について2回目、再建された仏舍利塔の偉容に感嘆しきりの一夜を過し、翌日、法門寺を出発して西北に位置する周原に向った。いうまでもなく西周発祥の地であり、前回にふれた古公亶父が北狄に追われ幽（『詩経』幽風の地、現在の陝西省彬県と旬邑県）から岐山南麓に移り岐邑を営んだところ。『詩経』大雅・緜に「周原 膴膴として 萑荼 飴の如し」とみえている。この近傍には周代の遺址が多く、発掘された文物を展示する博物館があり、充実した見学であった。

周原より反転して南へ下り扶風県域を過ぎ、東隣りの武功県が西へ扶風県深く切れ込んだあたりに、楊陵と呼ぶ区域がある。今回の主たる調査地に選んだ文帝陵は、この区域と扶風との県境にあり、楊陵区の地名も文帝楊堅の陵墓にちなむものらしい。

文帝陵は文帝と文献独孤皇后との合葬墓である。仁寿2年（602）8月、50歳で永安宮に崩じた文献皇后を、その年12月に葬ったのが太陵であり、2年後の仁寿4年10月、文帝が合葬されたという次第である。『隋書』の文帝本紀には「仁寿四年秋七月丁未、大宝殿に崩ず。時に年六十四」とあり「冬十月己卯、太陵に合葬す。墳を同じうするも穴を異にす」、つまり同穴ではなかったと断っている。最近出版された『中国文物地図集』などには「泰陵」と表記するが、泰・太通用するとはいえ、前回の玄宗泰陵とまぎらわしく、太陵が正しいことを指摘しておきたい。

文帝の死をめぐる煬帝による弑逆という穩かならざる風説が罷り通っている。噂の源は唐中期の趙毅撰『隋大業略記』あたりらしいが、残念ながら佚書となっており、直接確かめるわけにいかないけれども、話というのはこうであ

る。文帝の病床に詰めていた皇太子楊広（煬帝）は、かねて邪恋を燃していた文帝の寵妃蔡夫人を別室に引き込み、無礼な行為に及ぼうとしたが抵抗されて失敗。事の次第を知った文帝は激怒し、側近を呼んで即刻、かつて追放した前皇太子の楊勇を復位させるよう命令した。慌てた煬帝は肝胆相照らす仲の楊素と張衡に意を含め、文帝づきの者達をすべて退けたのち毒を盛らせた、というもの。唐末の馬總が残した『通曆』では、蔡夫人が陳夫人に入れ替わっており、司馬光の『資治通鑑』もこれにならい、かつ張衡だけを病床につかせ、後宮の面々を追いつくとすぐ文帝が崩じたので、「中外、頗る異論有り」——いろいろ取り沙汰された——と思わせぶりの言葉で締めくくっている。『隋書』陳夫人伝にも、それらしき記述があり、話としては面白いが、不思議なことに徹頭徹尾、煬帝を悪役に仕立ててはばからなかった唐の高祖・太宗周辺でさえ、誰一人として弑逆の事実を指弾した者はいないのである。最近、廈門大学の韓昇教授からいただいた『隋文帝伝』にも、当時こうした弑逆説はなく、文帝は自然死であると断定されているのには賛成である。

仁壽四年（604）秋七月甲辰（十日）、上（文帝）、疾甚だしきを以て仁壽宮に臥せ、百僚と訣を辭げ、並に手を握りて歎歎けり。丁未（十三日）大宝殿に崩ず。時に年六十四なり。

この『隋書』本紀の描写が最も信頼に足るものであろう。

トーモロコシ畑の唯中に埋没したかのような姿で、ぼつねんと立つ碑碣がなければ、珍しく



トウモロコシ畑に浮き上る隋文帝太陵全景



隋文帝太陵上より旧参道を望む（眼下に石碑あり）

樹木におおわれ、ただの小山かと思ふ太陵は漢武帝の茂陵より若干低く、規模は始皇帝の酈山陵より一回り小さい感じを受けた。恐らく盗掘されているが、隋の全盛期に築かれた陵墓のこと、本格的な発掘調査が待たれるところである。

義寧二年（618）三月丙辰（十一日）、右屯衛將軍の宇文文化及、武賁郎將の司馬德戡……城門郎の唐奉義、醫正の張愷等、驍果を以て亂を作し、入りて宮闕を犯す。上（煬帝）温室に崩ず。時に年五十なり。

悪逆無道の名をほしいままにし、親殺しの汚名までも着せられた煬帝の最期を、『隋書』本紀はさりとしたタッチで描いているが、その実、すさまじい修羅場となり、目を覆うばかりの地獄絵図が展開されたのである。

全国各地に起った反乱に怖れをなし、大業12年（616）7月、煬帝は江都の離宮へ移っていた。この日の夜半、寝所へ踏み込んだ反乱兵達は煬帝を捕えて外へ引き出した。恐怖のあまり煬帝の膝にすがりついて泣き叫ぶ12歳の末子、趙王楊杲を血祭りにあげた乱兵は、ついで息子の返り血を浴びた煬帝を斬殺しようとした。「皇帝には皇帝なりの死にざまがある。毒酒を持て」と命じたものの、毒酒がない。観念した煬帝は自分のマフラーを渡し、坐ったまま首を縊らせ絶命した、という。嵐が去り、生

きのびた蕭皇后は宮人達を指図し、ベッドを毀って棺を作り煬帝の屍を宮内の琉珠堂に密葬した。彼女は南朝梁の明帝を父に持ち、江南では忌まれる2月生まれの芯の強い女性で、波瀾万丈の生涯を送ることになる。

その年8月、江都太守の陳稜は煬帝の柩を探し出し天子の儀礼を備えて呉公台に改葬した。呉公台は雷塘の西、司徒廟界限にあり、呼名の由来は劉宋の陳慶之が築いた弩台を、陳の呉明徹が広陵攻撃の折に増築したことにある。のち唐が江南を平定した武徳5年（622）、雷塘の北側に移したのが現在の煬帝陵であり、近郷を皇墓墩と呼ぶゆえんともなった。

時はすぎ、嘉慶12年（1807）、清朝考証学の大家で『経籍纂詁』や『十三経注疏校勘記』の編纂などでも知られる阮元が、忘れ去られ「陵土、高さ七・八尺、周回二・三畝ばかり」に荒廃したままの煬帝陵を発見し、それなりの修繕を加え松50株を植えた。その模様は彼の『修煬帝陵記』（『瑣經室集』三集・卷二）に詳しい。その後の経過は定かでないが、1992年2月に訪れた時、ようやく標識が建てられ参道の整備が行われつつあった。補修が行われた割には高さ5メートルにも満たない貧弱なもので、もともと盗掘の恐れもない程度のもものではなかったか、否、陵墓が営まれたこと自体が僥倖の一語に尽きるか、と自問自答しながら別れを告げた。



雷塘の煬帝陵墓



隋の煬帝陵



隋煬帝陵全景

こどものための博物館 百周年！

—ブルックリンこどもの博物館「グローバル・シューズ展」に触れる—

— 瀬 和 夫

こどものための博物館は大阪市扇町にあるキッズプラザ大阪をはじめとし、日本でも急激に増えはじめています。

「こどものための」という明快なターゲットが示すように、利用者はなにを求め、館側の伝えたいことがどうすれば伝わるのかといった課題が直接に降りかかってくる。これにより、展示はオブジェクト・センタード（資料重視型）から、クライアント・センタード（利用者重視型）に向く。そして、次のような標語もある。I hear and I forget. I see and I remember. I do and I understand. この考えから、展示にハンズ・オンという手法を用いることが重視されることになる。

アメリカ合衆国ではこどもの博物館が280館をこえ、その発祥の地はニューヨークのブルックリンこどもの博物館（Brooklyn Children's Museum）である。この館は時代の変化を強く受けとめ、建物も展示も変化しつづけてきた。現在、2万7千点のコレクションをかかえる。今ある建物はアフリカ系やヒスパニック系のアメリカ人が多く住む町の一角、公園の地下にある。この地域環境を反映して、芸術、科学、環

境だけでなく、多様な文化についてのプログラムにも力が入る。

その多様性を世界中に押し広げ、数多い「クツ」のコレクションをもとに、昨年5月から10月まで、創設百周年を記念する「グローバル・シューズ展」が企画、展示された。現在、北アメリカの7つの博物館を巡回展示中である。ここでは、こどもの博物館の一端を知るために、その展示の様子を紹介しよう。

この展示は主にハンズ・オン、フット・インできる世界のクツ屋さんと世界中からのクツ工場という2つのエリアからなる。この構成は調査の結果、こどもたちがクツで連想する事柄の中でこれが多かったと言う。こうした調査はハンズ・オン展示では必要不可欠であり、基本的な概案づくりからデザイン当初の絵コンテをはじめ、こどもたちに意見を聞き、評価を受けるというのは至極当然となってきた。

展示ではこどもたちが身に付け、ロール・プレイし、調査活動をすることで、そのクツから人や場所の手がかりを得る方法を探索できるようになっている。解説文は足型のキャプション・プレートに英語とスペイン語が併記される。



専用テーブルでクツの注文デザインを描く

クツの店では、涼しそうなクツであるトンガのヤシのサンダルを探し、その源となる気候や文化にマッチしたクツの姿の糸口をつかむ。国やそこに住む人々のことを学ぶのにオランダや韓国、ペルーのクツやサンダルも観察する。16カ国のこどもたちがクツになりきって、クツの目線から観て描いた絵や詩のコレクションとそのこどもたちの生活や作業の様子を見ることが出来る。クツに関わる話や写真のある本も読む。また、自分のサイズを様々な秤で測る。カウボーイブーツやフンダワラ、消防士のクツなど特殊な仕事や生活、スポーツのためにデザインされたクツを試す。キリパチやモンゴル、アイスランドの家族のクツの特徴をみるためショーケースの中に身を置く。これらは材質を確認し、組み合わせ、クツに手紙を書き、計量し、履き、環境に入り、クツを履いていた人を確認するもので、地理、気候、民族、家族など、ことごとく五感でしかも体系だって感じ取れるよう配慮される。

さて、クツの工場ではロール・プレイすることで、世界のクツの製作過程を探る。まず、世界地図を把握し、電話で世界のスニーカーの仕入れをすることからはじまる。そして、材料試験、専用テーブルで注文デザイン、よちよちデザイナーはシュー

ズのパネルはめ込み遊び。組立ライン生産では、モカシンやコンバースのスニーカーを自分でつくる。最後に船積み箱で、クツの製作ビデオを見ながら、材質やクツの出入荷をチェックして生産を完了する。

クツの宣伝までもプログラムに組み込まれるここでは、現実にあるプロセスを知らず知らずのうちに感じ取ることが可能だ。個別には、展示開催後、材料試験コーナーが不評なので、改良案を練ることも忘れてはいない。

このようにハンズ・オンを主とするこどもの博物館の展示は、その期間中も利用者の様子を観察してより親しみやすく学びやすいものにするための努力が払われることになる。



「クツ」がつくられた材質と合わす



アメリカ・インディアンの底の平らなモカシンという「クツ」を編む

平戸の海外交渉史跡

松 浦 章

日本とオランダの交流が開始され400年になるとのことで、2000年1月から2001年3月まで長崎県は「ながさき阿蘭陀年」として多くの記念行事を行っている。これに関連して久しぶりに訪れた長崎県平戸市の整備されつつある史跡、とりわけ海外交渉史に関連深い史跡の一端を紹介してみたい。

I オランダ商館跡附近

平戸にオランダ商館が開設されたのは1609年のことで、平戸の崎方町に倉庫つきの民家を借りて日本とオランダの貿易を開始したとされる。その後、規模を拡大し1640年には最大となり、崎方町の常灯鼻に隣接する角地に近年「オランダ商館跡公園」(写真①)として整備され同地にその模型も展示されている。さらに17世紀前半のオランダ商館の石造倉庫の基礎部分の石組み(写真②)が実地見聞できるように保存されている。周辺には「オランダ井戸」と呼称される井戸や、オランダ商館の倉庫の壁とされる「オランダ塀」の一部なども保存されている。

オランダ商館跡公園からほど近いところに平戸観光資料館(平戸市大久保町)がある。ここ

の所蔵品の有名なものは「こしよろのジャガタラ文」である。寛永の鎖国令で平戸のオランダ商館が閉鎖される直前にジャガタラ追放となったキリシタンが故郷へのたよりとして「更紗」に認めたジャガタラ文で「日本こいしや こいしや」で始まり「うばさままいる こしよろ」で終わる有名な歴史資料などが保存されている。

松浦史料博物館(平戸市鏡川町12)は16世紀後半以降、19世紀末まで平戸藩の当主であった松浦氏に關係する歴史資料を所蔵する。16世紀後半以降の日本の海外交渉に關係する資料や平戸藩政に關する重要な資料を所蔵している。近年周辺の道路などが整備され(写真③)、松浦史料博物館でも観光客向けのショップを隣接し設けている。

II 中国貿易關係史跡

鏡川町には長崎県指定の史跡の「六角井戸」(写真④)がある。日明貿易、倭寇關係の史跡とされ、当時の船乗りが飲料水用に使用したとの伝承がある。さらに鏡川町の親和銀行の向かいの高台の住宅地に「五峰王直居宅跡」(写真⑤)とされる碑がある。同地は印山寺跡とされ現在は個人の居住地になっている。王直と平戸の關係は松浦平戸藩の草創期の藩主であった松



写真① オランダ商館跡公園(中央が商館模型、灯籠が常灯鼻)



写真② オランダ商館石造倉庫の基礎部分



写真③ 松浦史料博物館前の通り
(通りの奥の石段上が松浦史料博物館、手前のモニュメントガリチャード・コックス)

浦隆信（まつら たかのぶ 1529—1599）との間に始まるとされている。王直とは中国史では明代における嘉靖の大倭寇の中心人物とされる海商王直のことである。松浦家古文書の「深江記」には、

其頃大唐ヨリ五峯ト云フ人渡リ、今印山寺ノ所ニ唐様ニ家ヲ建テ居住セリ、是ニタヨリ大唐ノ商船来リ、其上南蛮ノ黒船マデ平戸津へ来リケレバ、唐、南蛮ノ珍物ハ年々ニ満々タリ、然間、京堺其外諸国ノ商人集候テ、世ニハ西ノ都ト申ケルト也¹。

とあり、王直の平戸への来着によって平戸の海外貿易が大きく開かれ、中国商船だけでなく西欧の貿易船も来航するようになり、さらにこれらの外国貿易を目指して京都、堺などの国内商人も平戸に参集するようになり西の京都と呼称されるようになったと記されている。その意味で王直は平戸にとっては海外貿易の端緒を開いた人物であった。

Ⅲ 英国商館跡

平戸はオランダ、中国だけでなくイギリスとも関係があった。平戸市の中央通りに面する十八銀行の平戸支店の前に「史跡 英国商館跡」の碑がある「THIS PLAQUE MARKS THE SITE OF THE ENGLISH TRADING

HOUSE（1613—1623）この一帯は英国商館が設置されていた跡である。エリザベス女王の来日を記念して建てる。昭和50年10月13日十八銀行建之」と記されている。イギリス東インド会社の貿易船で来日したリチャード・コックス（Richard Cocks）（写真③参照）が商館を創設し、館長となった。彼の日記は『リチャード・コックス日記』として知られ、17世紀初期の日本に関する重要な史料でもあるが、その中に「茶」に関する記述が見える。この日記の中での茶の表記は“tea”ではなく“chaw”である。中国福建語系の“te”から派生した英語の“tea”がイギリス社会に定着する以前に、日本に伝来していた広東語系の“cha”音を聞き記した“chaw”であることに注目したい。コックスは、彼の死後一世紀以降にイギリスにおいて茶の飲用が爆発的に流行する以前に茶を知ったイギリス人であったのである。

1969年に大庭脩名誉教授のゼミ旅行に参加して最初の、その後1974年に訪れて以降26年振りの平戸ではあったが、平戸島と九州本土との間には橋が架かり、平戸島でも多くの史跡が発掘調査され、町並みが整備されるなど大きな変化が見られた。上記したのは平戸の海外交渉史に関係する史跡の一端である。

1 葉山萬次郎『平戸の対外貿易時代の話』（財）松浦史料博物館、1961年1月初版、1982年5月五版、12-13頁。

【参考文献】『歴史の平戸』平戸文化財研究所、1975年6月初版、1998年12月17版。



写真④ 六角井戸



写真⑤ 五峰王直居宅跡碑



写真⑥ 英国商館跡碑

銅鏡に見る神獸紋様・銘文の配置

汪 勃

奈良県御所市の鴨都波1号墳から三角縁神獸鏡が四面検出された。なかに「吾有好同清且明、神守仙人居中央、今世以孫宜□王」の銘文をもつ三神三獸鏡がある。発表された何紙かの新聞に掲載された鏡の写真の置き方が不統一であることに気づいた。この銅鏡は中国製か日本製かについて、研究者の見解が分かれているが、ここでは、鏡の置き方について、漢代銅鏡の神獸・銘文の配置に見られる思想から、検討を加えたいと思う。

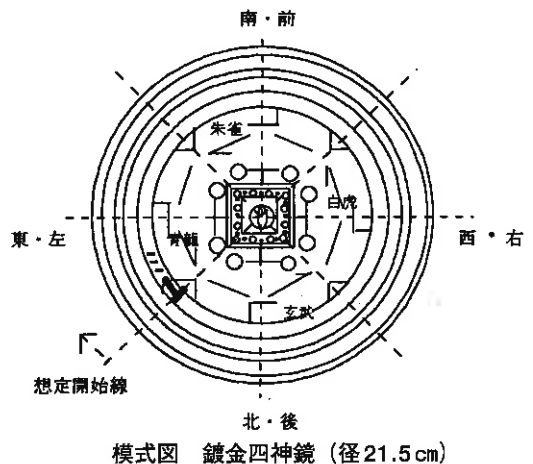
衆知のように中国は漢字の国であり、古来から思想と制度を整えていた国でもある。前漢の武帝から「独尊儒術」という政策がはじまったが、両漢およびその後の両晋時代には陰陽思想、黄老思想、神仙思想を中心としていた。このなかで神仙思想は種々な神獸に係わっている。それぞれの神・獸には一定の意義を含んでおり、これらの思想には位置（配置）というものが非常に重要な意味をもっているため、神獸鏡についての研究はこの時代の思想と不離一体である。文献には、「春官為青龍」（『漢書 表第七上』）、「青龍移辰、謂之歲、歲首至也」（『後漢書 律曆下』）などの記載があり、「一年の計は春にあり」のような俗語もある。万物はどこからはじまるのかは非常に重要な意味をもっている。ただし、銅鏡における神獸紋様の配置はすべて理論に合致するわけでもないが、研究は思想上の意義に定められた銅鏡の正しい置き方から着手すべきだと考えている。

陰陽思想、分野説などに関わる中国古代の思想については、諸子とその論著のなかに論じていた。例えば、「凡回於天地之間、包於四海之内、天壤之情、陰陽之和…四時也、則曰陰陽…」(『墨子 辭過』)、「陰陽四時運行、各得其序」(『莊子 知北遊』)、「四時代御、陰陽大化」(『荀子 天論』)、「凡人物者、陰陽之化也。陰陽者、造乎天而成者也」(『呂氏春秋 知分』)、「春秋冬夏、陰陽之推移也。時之短長、陰陽之利用也、日夜之易、陰陽之化也…陰陽者、天地之大理也、四時者、陰陽之大經也」(『管子』)

など、陰陽と四季などに関する論説が多くある。「分野」は方位の基本を形成している。

両漢時代の神獸鏡は、四神鏡からはじまっていた。龍は「神獸」(『史記 孔子世家』集解、『晋書 載記/呂光』)で、玄武は「水神之名、司空水土之官也」(『後漢書 朱景王杜馬劉傳堅馬列伝』)である。『礼記 曲礼上』に、「行、前朱鳥而後玄武、左青龍而右白虎」と明記し、四神は方位を示すものである。後に盛行した多種の神獸鏡に含んでいる思想は四神思想の根本と一致しているため、四神鏡を基礎にしてその共通点が探れると考えている。鍍金四神鏡(天理参考館蔵 樋口隆康『古鏡図録』74)のような典型的な銅鏡がある(模式図)。この銅鏡は四葉花座に円鈕座で、孔は縦方向である。銘文は、「尚方…」の49文字があり、文頭にある3つの点は「…」記号のように並んでいる。同書の図版7(銘文56文字で文頭に「…」)も同型である。他に銘文のない図版76もほぼ同じ様式である。この類型の銅鏡は他にも多数検出されている。例えば、鄂県の天河村1号漢墓から出土した銅鏡や、西安の十里鋪、賀家村1号漢墓から出土した銅鏡などが挙げられる(参照『中国出土古鏡図録』ほか)。

このような銅鏡には、中心・方格規矩の角部・銘文の文頭よりはじまる開始線が想定でき



る。外区の銘文頭に乳・点、空白など、始点を示す何らかのものがある。四神は南（上辺の左半部・上辺）に朱雀、北（下辺の右半部・下辺）に玄武、東（左側の下半部・左側）に青龍、西（右側の上半部・右側）に白虎の配置を呈するものが典型的である（異なる例も見られるが、四神の頭向は基本的に反時計回りとしている）。十二支（文字または図像）は下部の中央から3つずつの時計回りに表している。銘文は東方を示す左側から、時計回りとしている。想定開始線の下からはじまる事例（洛陽西郊7052号墓出土銘帯縁四神鏡 樋口『古鏡』図68）もあるが、左側中央部の上や中央、下からの事例もある。「TLV」字形規矩紋である。乳によって構成できる方形の1つは水平方形である（方形が1つのみ構成できる場合は、方形の対角線は十字としている例もある）。鈕孔の一方は玄武・白虎の間に向き、一方は青龍・朱雀の間に向き、真っ直ぐ横・縦となっているのは典型的である。漢の神獣鏡の神獣紋様はほとんど分段した組としての紋様であり、全体からその配置を観察すれば、銅鏡の置き方は明らかである。

漢晋時代の典型的な銅鏡の紋様・銘文は、すべて左側（青龍・東・春）からはじまっている。銅鏡全体の同心円と方格規矩紋、乳、渦紋、鈕座の形などの特徴から考えれば、銅鏡は「四面八方」に分けられる。銅鏡紋様の配置には、時間をあらわす四神・十二支と、空間をあらわす四面・乳で区分される八方などが見られる。

漢晋時代の文献には、「左龍右虎」の銘文のあるものが多い。ここの「左」と「右」は、現代の地図の「左西右東」と異なっており、当時の地図は南を上にならされていたからである。銅鏡の銘文にも紋様の左右配置などを明確に刻んでいるものも数多くある。例えば、唐草紋縁四神鏡（富岡謙蔵氏旧蔵 樋口80）の銘文は、「新有善銅出□陽、□□銀錫清且明、左龍右虎掌□□、朱雀玄武順陰陽」とある。韓国ソウルの崇田大学校蔵鏡・方格規矩四獸鏡（樋口『古鏡』図72）の規矩に「泰言之紀從鏡始蒼龍在左」と明記している。現代人の習慣を以てこれらを考えると、模式図を180°反転して見ることになる。

中国で出土した銅鏡にも四神の位置を誤った例が少なくない。すべて上述した思想理論と合

致するわけでもない。以上述べた典型的な銅鏡の紋様、特に四神の配置は、隋代に入ってから変化した。隋唐時代から、銅鏡上の神獣の配置・銘文の始点はそれぞれあるが、一定の規律が見られる。例えば、玄武と十二支の「子」とは同じ方面にあり、銘文頭も何らか区分する印がある。四神の配置は東の青龍と西の白虎と双方とも上の朱雀に向くようになり、四神の配置およびその頭向が決着した。

今回鴨都波1号墳から出土した「吾有好同」鏡は、銘文頭「吾」は東側下部の乳の下にくる。そして、二体並ぶ神仙はほぼ南の中央にあり、一体の神仙は二体の神仙の反対側にくるため、乳・銘文・全体の紋様はその方位が明らかとなる。「吾有好同」鏡は、上述した典型的な銅鏡と一致する点があるが、疑問点もある。例えば、21文字の銘文は外区の乳と同心円上にあり、その配置が乳を銘文の区分けとして見ると6、4、6、5文字となり、左字が幾つか存在している。また、八つの乳の全体の位置は少し歪んで



鴨都波1号墳出土「吾有好同」鏡

いるため、規範の「四面八方」にはならない。その鋳型の製作は神獣を彫刻した後、乳を入れたと推定できる。すなわち、さきに「四面八方」を定められなかったのではないかと考える。そして、中国では「吾有好同」鏡の乳と同じ配置する事例の製作時代は比較的早く前漢時代に遡るが、これに対して鴨都波1号墳の造営時代は4世紀と比定されていることから、「吾有好同」鏡の倣製鏡の可能性が高い。

硯・文房諸具との出会い 平成12年度関西大学博物館寄贈資料について

関西大学名誉教授 田 中 行 雄

私は機械工学科に所属し、機械工作学を専攻してきた。バイトで金属を削る切削、砥石で削る研削、微細砥粒を使って鏡面光沢を得るバブ仕上げなどであり、出てきた削り屑は当然不用のものと考えていた。ところがある時、ふとその逆は無いかと考えた。わさびやおろし大根などはすりおろした削り屑が有用なのである。

そこで逆発想で、硯が工具で非加工物が墨の関係の思いついた。削り屑の墨汁が大切なのであり、この墨汁の良し悪しに書家や画家は大変神経を使う。硯と墨の相性、墨の磨り方の善し悪しなどにうるさい。ある書家は曰く、「熱した鉄板に蠟を当てるように」とか、「幼児に」とか、また「気だてのおだやかなお嬢さんがゆっくり磨ったものが最高」とか。要するに力ま

かせにゴシゴシがいけないのである。

そこで実験をした。まったく機械的に墨を往復運動させ、墨にかかる静荷重をいろいろ変化させた。詳細は省くが、結論は約200g/cm²の押付圧が最高ということがわかった。書家のいうとおりであった。

硯の鋒鋩（ホーボー、ヤスリ目）を選びながら、いくつかの硯でこの実験をおこなってみて、最高の成績が得られたのが端溪硯であった。学会で発表したら、古老の先生に好評であった。

その勢いで、各種硯や、ついでに文房諸具も収集しはじめたが、このコレクションが逸散するのを惜しむ余り、関西大学博物館へ寄贈することにしたのである。



端溪蘭亭硯



端溪梅花坑眼脚硯



中国文房諸具

このたび、田中行雄名誉教授より寄贈になった文房諸具は、56点あり、端溪蘭亭硯や端溪梅花坑眼脚硯、歙州金星硯、洮河緑石硯、松花河緑石方硯などの中国各地の多様な石材の硯、筆管や墨、印石、水滴、筆架などからなる。

その文房諸具は、博物館所蔵の内藤湖南資料とともに、文人・学者の文房収集の貴重な資料である。博物館では、その文房諸具の展示・公開・利用などを行なっていきたい。

平成12年度博物館企画展及び博物館講座 古墳の発掘―兵庫県芦屋市八十塚古墳群の 調査と研究―の開催について

関西大学博物館では、平成12年度博物館企画展「古墳の発掘―兵庫県芦屋市八十塚古墳群の調査と研究―」を平成12年4月3日から5月20日まで、41日間開催しました。4月2日（日）と5月21日（日）の特別開館日をあわせると、合計2,152名の入館者がありました。また、この企画展にあわせた平成12年度博物館講座を、5月13日（土）に開催し、約60名の聴講者がありました。

博物館企画展「古墳の発掘―兵庫県芦屋市八十塚古墳群の調査と研究―」は、関西大学文学部の米田文孝助教授と考古学研究室の大学院生・学生が取り組んだ、古墳の発掘調査を取り上げました。この発掘は、兵庫県芦屋市にある八十塚古墳群の一支群を関西大学考古学研究室が中心となって発掘したもので、1994年6月から9月まで行われました。

夏休みを中心として、八十塚古墳群岩ヶ平支群第52号～第56号墳を発掘調査し、それらの古墳がどのように作られ、どんな埋葬がされているのか、どのように埋没しているのかについて、詳細な調査記録を作成しました。また、この記録や出土遺物を大学の研究室に持ち帰って、その成果を整理し、発掘調査報告書を纏めます。

企画展では、単に調査の成果や出土品をお見せするのではなく、この古墳の発掘調査が、ど

のように行われるのか、その手順をおいながら展示し、さらに発掘調査が終わってから大学の研究室に帰って、さらに行われる整理作業と研究の様子をお見せすることに心がけました。

展示品は、出土した遺物等だけではなく、発掘調査に使うスコップや測量器械やカメラから始まり、大学の研究室の作業机まで展示しました。ふつうの展示とは異なり、すこし「汗くさい」感じの企画展となりましたが、作業した大学院生や学生の皆さん自身を展示できなかったことは残念でした。

博物館講座は、この企画展にあわせて行い、発掘担当の米田文孝助教授、芦屋市教育委員会の竹村忠洋氏、西宮市教育委員会の合田茂伸氏、大学院生の日置智氏により、リアルな発掘の実態と、その成果が報告されました。聴講者は、講演会と展示を照らし合わせて、大学の古墳発掘がどのように行われるかに興味深げでした。

考古学研究の基礎となる発掘調査は、その遺跡のある地域の皆さんや社会に、いろいろ負担をかけ、またご協力を頂きながら行われます。発掘調査とその研究がどのように行われるのかを多くの方に知っていただくことは、大学の考古学研究のためだけではなく、地域の豊かな環境を整える一助にもなりえるのだということをご理解いただければ幸いです。



展示風景



展示風景

三角縁神獸鏡の製作技法

米田 文孝 川口奈穂子

『阡陵』第40号では、新収蔵資料である複製内行花文鏡の製作実験について紹介し、その概要を報告した。その後もこの実験は定期的に継続して実施しているが、今回は三角縁神獸鏡の製作技法の復元に視点をのこした製作実験の概要を報告する。なお、製作実験の実施には複製銅鐸・複製内行花文鏡を寄贈していただいた東大阪市の上田合金株式会社(代表取締役上田富雄氏)で引き続きご指導、ご協力を賜っている。

まず、復元実験に使用する原型資料として直径21.5cmを測る複製三角縁神獸鏡を用意し、この三角縁神獸鏡の踏み返し鏡を製作した。この複製三角縁神獸鏡(以下、原鏡)の紋様についてみると、その内区には神像と獸像が4体ずつ交互に組み合わせて配置されている。また、内区外周には「天王・日月」の銘文と獸形を組み合わせた紋様帯が圍繞しており、一般的に、「天王日月銘三角縁獸文帯四神四獸鏡」と分類される鏡式である。

さて、鑄造実験では今日的な鑄物製造で多用される砂型鑄造法と、近代化以前に主流であった土型鑄造法との両者を試みた。まず、砂型鑄造法では原型を粒子の細かい鑄物用合成砂(シリカサンド)で型取りし、その砂型を炭酸ガスにより硬化させる。その後、砂型に塗型剤を塗布してから鑄造するという方法である。一方、土型鑄造法では原鏡をあらかじめ篩で濾して粒度を整え夾雑物を除去した微細な粒子の土と粘土とを混合したもので型取りした後、手捏ねのみで固めて鑄造する方法である。

次に、製作技法の実際について概観していこう。砂型鑄造法と土型鑄造法の両者とも、基本的に鑄型を両面からの合わせ型にして、湯(銅・錫・鉛などを溶解した合金)を鑄込む方法は同様である。主たる相違点は鑄型を硬化させる目的の炭酸ガスを使用するか否かである。

まず、原鏡の鏡背面(A面)から型取りをはじめるが、原鏡の鈕孔を塞いだのち仕切り板の上に据え置き、外枠を設置した後、離型剤を枠内全体に振りかける。その上に合成砂(砂型鑄

造法の場合、以下略)または土(土型鑄造法の場合、以下略)を目の細かい篩で全体に均一に篩い被せていく。3回程度篩を通した後は直接、合成砂・土を載せ置いていき、外枠高の約半分までに達すると、外枠周囲の合成砂・土を上部から圧縮する。特に、鏡の本体部分は紋様の細部を明確に鑄出すために、強く押さえ込む。さらに続けて外枠高よりやや上位まで合成砂・土を載せ置き、全体を叩き締めていく。陥没した箇所には合成砂を補充し、板を使って外枠と同一高に揃える。その後、砂型鑄造法の場合では合成砂に炭酸ガスを充填し硬化させるが、土型鑄造法の場合では鑄型を叩き締めて固めるのみである。

その後、鏡面(B面)側の型をとるため、鑄型の上下を反転させる。反転し仕切り板を取り除いた鑄型面には鏡面を上位にした原鏡が埋め込まれた状態になっているが、その外枠上に同寸で別個の外枠を重ね置いて、鏡面側の型取りをはじめる。工程は、鏡背面と同様に合成砂または土を篩い被せていき、突き固めていく。このようにしてA・B両面の鑄型を形成した後、原鏡を抜き取る。この原鏡の抜き取りは、鏡面側の鑄型を反転・移動させた後、鏡背面側の鑄型に埋め込まれている原鏡を除去する。

次工程として、ヘラ状工具を利用して湯口用の切り込みを入れるが、砂型の場合は硬化の度合いが高いため、削り込むようにして湯口を作る。これに対して、土型の場合は掘り取るようにして、慎重に湯口を設ける必要がある。その後、砂型では鑄型の表面を滑らかにする目的で塗型剤(モールドペイント)を塗布し、燃焼させてからA・B両面の鑄型を慎重に合わせ、注湯の準備をする。一方、土型では自然乾燥させるだけで、塗型剤などは塗布することなく型を合わせる。

その後、注湯時の破漏を防止する目的で鑄型を堅固に結束し、重しとしてインゴットを載せる。この重しは20 kg以上載せない注湯時の内圧に耐えきれず、湯が溢れ出すことがある。

注湯後、約30分で鑄型を打ち壊して製品を取り出し、合成砂または土を払い落として自然冷却する。製品自体が内包する熱が外気温に近づいた後、湯口を切り離して整形する。

このようにして鑄造した製品は、基本的に鏡背の紋様部分は鑄上がったそのままの状態での研磨を施さず、鏡面のみ研磨していたと推定できる。また、三角縁神獸鏡のように、その縁部の断面が三角形である場合は、鑄型を破損せずに抜き取ることが可能である。しかし、平縁の場合には原鏡抜き取り時に鑄型を損傷する可能性があるため、その鏡部の内縁部は分類上平縁といえども厳密には垂直ではなく、鏡面の反りとの関係をも含めて斜縁である必要がある。その結果、原鏡に供用する場合はあらかじめ研磨時に削り取っており、あるいは何らかの事後の理由から原鏡に供用する場合には、鑄造時に研磨を加えて必要な範囲で整形していた可能性がある。

次に、砂型と土型とによる鏡を比較してみよう。砂型の方は鑄肌が粗く、型押しが不十分である部位の紋様は細部表現が鑄潰れている。一方、土型の方は砂型よりも鑄肌が細かく、紋様の高低差が明確に表現できる。ただし、鑄型の粘土が原鏡に貼り付いた結果、紋様自体が欠損した部分が観察できる。

また、周知のように青銅は冷めると収縮する。今回の鑄造では砂型の場合で約2mmの縮みが、同じく土型の場合では約3mmの縮みが計測できる。これは「同範鏡」を分類する場合の一つの要素として、鏡径を重視することとも関連する問題である。なお、ここでいう「同範鏡」とは、同じ鑄型(範)を使用する同型・同大で、同一紋様の鏡群を指すが、これに対しては、同じ鑄型(範)を複数回使用することは不可能であるとし、同一の原鏡で複数の鑄型を製作し鑄造した鏡群は、「同型鏡」とすべきであるという見解もある。

このような三角縁神獸鏡の製作地をはじめとする諸問題は、小林行雄氏の見解をはじめとする従来の紋様の分析を中心とする研究に加えて、神像・獸形の表現や縁部断面、鈕孔の形態変遷などに注目した詳細な研究が進められつつある。このように三角縁神獸鏡はそれ自体が諸問題を解決する鍵を内包しており、今後の鑄造

実験もこの視点に立脚して実証的に進めたいと思う。

【参考文献】

- (1) 飛鳥資料館、1996、『飛鳥の工房』。
- (2) 化覚明ほか、1986、『中国治鑄史論集』、文物出版社。
- (3) 京都大学文学部、1989、『椿井大塚山古墳と三角縁神獸鏡』。
- (4) 岸本直文、1989、「三角縁神獸鏡製作の工人群」『史林』72-5。
- (5) 久保智康、1999、「鑄型と製品からみた鑄鏡技術の変遷—日本の古代から近世まで—」『鑄造遺跡研究資料1999』、鑄造遺跡研究会。
- (6) 小林行雄、1961、『古墳時代の研究』、青木書店。
- (7) 新納泉、1991、「権現山鏡群の型式学的位置」『権現山51号墳』。
- (8) 福永伸哉、1991、「三角縁神獸鏡の系譜と性格」『考古学研究』38-1。
- (9) 吉田晶子、1998、「真土型造型における鑄物土の再製造システム」『網干善教先生古稀記念考古学論集』下巻、網干善教先生古稀記念会。
- (10) 米田文孝・川口奈穂子、2000、「新収蔵資料複製内行花文八葉鏡」『阡陵』第40号。



鏡背(A面)側の土型

博物館だより

◇平成12年度博物館企画展「古墳の発掘—兵庫県芦屋市八十塚古墳群の調査と研究—」を、4月3日(月)～5月20日(土)の期間に開催しました。4月4日(日)と5月21日(日)の特別開館日を合わせると2,152名の入館者がありました。関西大学考古学研究室による兵庫県芦屋市八十塚古墳群の発掘と研究が、どのように行われ、またどのような成果があったのか、発掘調査の実態に興味を持った見学者が多く訪れました。また、平成12年度関西大学博物館講座が企画展開催に合わせて5月13日(土)午後1時から3時半まで、関西大学第1学舎AV-B教室で行われ、約60名の聴講者がありました。講師・演題は下記のとおりです。

「古墳の発掘—兵庫県芦屋市八十塚古墳群の調査と研究—」

関西大学助教授 米田 文孝氏
西宮市郷土資料館学芸員 合田 茂伸氏
芦屋市教育委員会技師 竹村 忠洋氏

◇平成12年度開催の考古学入門講座の詳細は下記のとおりです。

「衣食住」をテーマとした3ヶ年のまとめとして、「衣飾の歴史とその意味」と題して衣飾を取り上げます。

月 日	講演題目	講師
第1講 10月28日(土)	高松塚古墳人物像の服飾	関西大学名誉教授 関西大学飛鳥文化研究所所長 網干 善教
第2講 11月4日(土)	衣服とアクセサリーの起源	関西大学博物館学芸員 山口 卓也
第3講 11月11日(土)	卑弥呼のアクセサリー	大阪府教育委員会 文化財保護課技師 宮崎 泰史
第4講 11月18日(土)	大王と豪族の威厳 —古墳時代の衣飾—	関西大学助教授 米田 文孝
第5講 11月25日(土)	着る・飾る —民俗学から見た衣飾の歴史とその意味—	関西大学教授 関西大学博物館長 上井 久義

会場：関西大学天六キャンパス（大阪市北区長柄西1-3-22）309教室

時間は午後2時～午後4時 ただし初回は午後1時半から開講式。

問い合わせは、関西大学事業局事業課（電話06-6368-0279）へ。

編集後記

『肝陵』No.41をお届けします。今号は、上井久義館長、藤善真澄教授、松浦章教授に執筆を頂きました。米田文孝助教授と考古学研究室の皆さんには、鏡の製造実験についての報告を頂きました。大学院生の汪勃氏には鏡の正位置についての論考を頂きました。

大阪府教育委員会の一瀬和夫氏からは、最近の博物館について執筆を頂きました。

今年度は、本文にもありますように、田中行雄名誉教授より中国の端溪硯など古文房の

ご寄贈を頂きました。厚く御礼を申し上げます。

表紙写真は、頁岩製石槍で、右が岩手県遠野市下附馬牛町出土、左が岩手県三崎出土、松陰堂との朱書きがあります。

関西大学博物館彙報 No.41 平成12年9月30日 発行
関西大学博物館 編集
ナニワ印刷株 印刷